

中央アジア旅行記：ウズベキスタンと中国新疆ウイグル自治区

By 三上吉彦（中国・大連） 2013.07.02.初版, 07.12.第2版, 07.15.&22.第3版

内容 Contents

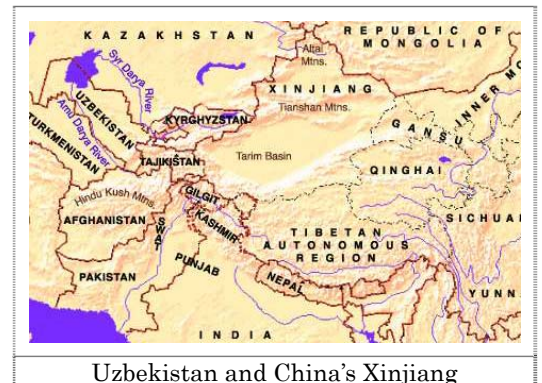
English Summary.....	1
要約.....	1
中央アジア（1）：ウズベキスタン旅行.....	2
旅行準備.....	2
旅行.....	2
旅行から帰還後.....	5
中央アジア（2）：中国新疆ウイグル自治区・敦煌・西安旅行.....	5
旅行準備.....	5
旅行.....	6
旅行から帰還後.....	9
結論.....	10

An English Summary

In 2013, while I lived in Dalian, China, I had a chance to visit Central Asia: Uzbekistan and China's Xinjiang Uyghur Autonomous Region. Here is a detailed travelogue of these trips in Japanese. Its shorter version in English, Japanese and Chinese is available at:

<http://www.abt247.com/logos/books/world.html#uz>

First in May, my wife and I joined a tour group from Tokyo to Uzbekistan and visited Tashkent and Samarkand, the two cities along the ancient Silk Road. We also stayed overnight at a tent in the Pamir Plateau and enjoyed Uzbekistan's Mother Nature. Then in June, my nine friends and I went to Xinjiang and visited Urumuqi, Turfan and Kuqa; crossed the Taklamakan Desert on the cross-desert highway that was recently built for drilling oil; and went as far as Hotan, the center of the jade trade, and Kashgar, the westernmost city of China; and came back to Dalian by way of Dunhuang in Gansu Province, China's corridor to Central Asia, and Xi'an in Shaanxi Province, the starting point of the Silk Road. The people who live in this part of Central Asia speak Turkic languages, and some Russian in Uzbekistan.



Uzbekistan and China's Xinjiang

日本語要約

まだ中国大連に住んでいる 2013 年に、中央アジアへ旅行する機会がありました。5月にウズベキスタン、6月に中国新疆ウイグル自治区へ行ったもので、我々日本・中国・韓国／朝鮮の者にとっては唐時代の玄奘三蔵法師が孫悟空と共に歩いた道でした。以下に私の週間日記から抜粋して旅行記とします。これが長くて読むのが億劫な人は

<http://www.abt247.com/logos/books/world.html#uz>

に簡易版（英中日文）があります。写真集はすでに Mixi へ載せていて http://photo.mixi.jp/view_album.pl?album_id=500000084553681&owner_id=3258267

<http://mixi.jp/home.pl#!/album/3258267/500000084553858>

後で Facebook へも載せるつもりです。



Xuanzang in the 7th century took this Silk Road from China to India and back.

中央アジア（1）：ウズベキスタン旅行

旅行準備

アミアン・マールーフ著『サマルカンド年代記、「ルーバイヤート」秘本を求めて』(Amin Maalouf, «Samarcande», 1988)を図書館から借りて読み終わった。ウズベキスタンへ行ってサマルカンドへも行くので借りてきたもので、レバノン生まれのアラブ系フランス人が書いた歴史フィクション。11世紀に活躍したオマル・ハイヤームがサマルカンド・イスファハーン・ネルヴで詩集『ルーバイヤート』を完成して、その手稿が失われたのち、18世紀後半にパリで出現し、フランス系アメリカ人がイラン立憲革命後に入手して、それを持って豪華船タイタニック号で渡米する過程で再び失われる模様を書いて、まずまずだった。(2013.05.08.) 東京へ行ってついで... 東京駅で下りて、銀座通りの丸善本社で大連のタンザニアからの留学生がヘミングウェイの本『The Snow of Kilimanjaro』(キリマンジャロの雪)を見たいといていたのでそれを見つけて買って、旅行ガイド『Lonely Planet, Central Asia』(2010年)は丸の内本店の方にあるというので、そこへ行くのは初めて行き、この本を入手できた。このガイドブックにはもとソ連邦の中央アジア5か国以外にアフガニスタンも載っていて、ウズベキスタンについてはカリモフ大統領の強権政治と少数民族への弾圧、南部のテルメスを通してのロシアとアメリカのアフガニスタンへの侵攻などが生々しく書いてあり、思わず今度の旅行の該当箇所を読み終えてしまった。(2013.05.29.) あとは『地球の歩き方、中央アジア』(最新版)をワイフが借りてきていたので、これを持って旅行へいった。



(写真は左から：中国の天山山脈を見降ろしながら東京からタシュケントへ飛行、雪山を見上げながらアクサルサイ渓谷を散歩、チムガン山中で原種チューリップ；Looking down on the Tianshan Mountains, Walking in the valley toward the snow-capped Tianshan Mountains, and Looking for the original species of tulips in Tashkent's suburbs)

旅行

先週金曜日から、いまウズベキスタンの旅行(ユーラシア旅行社のツアー)にきている。中央アジアへ私は初めてくるので、この数週間「地球の歩き方」以外にいろいろな本を読んできた。初日：朝4時起きで、6:22大船発の成田エクスプレスで成田に着き、25人のツアーで(男性7人)、みな集合時間より早くに着いている。10:30にウズベキスタン航空で出発して(ウズベキスタン産のワインは以前の日本の赤玉・白玉ポートワイン風で正直まずかった)、現地時間15:00にタシュケント飛行場へ着いた。タシュケントまで9時間の飛行は北京、包頭、ウルムチの上空を通り、圧巻は2つの沙漠を見下ろせて、時々雲が出てきた以外は、こんなに雲がないことは珍しいという。

2つの沙漠というのは、まず包頭のあたりから雲が晴れて大きなゴビ砂漠が延々と3時間くらい続き、右側に雪をいただく山脈が見えるので、空いている席を探してカメラを持って移動する。(客室乗務員からは写真を撮ってはいけないと注意を受けるが、私は規律人ではなくて自由人だ。)沙漠を横切る道路や石油の採掘所・輸送管らしきものも見える。次にウルムチの大きな町が見えて、このあたりからは左側に雪をかぶった天山山脈が現れ、そこを横切って山脈の南側へ出て飛行して、左にタクラマカン砂漠を2時間くらい見る。それから中国・ウズベキスタンの国境を越えて19:30(現地時間15:30)には、日本の地方の空港みたいなタシュケント空港へ到着。気温は33℃で暑い。通関などに1時間くらいかかり、特別バスで今回のガイド(Asia Adventure社のターニャ Tanya)が迎えにきていて、15分くらいで市内のホテルへ到着。空港には一般売店がなかったが、ホテルの売店でやっとウズベキスタンの地図(6千スー)を見つけてこれからの訪問先を確認できた。ホテルは国立劇場のすぐ前にあり、19:00からの夕食前に、戦後シベリア抑留日本人が建設して1966年の大地震でも壊れなかったことで有名なこの建物を散歩がてら見にいった。(2013.05.17)

2日目：アクサルサイ溪谷。朝早く起きてホテルのロビーでインターネットを使う。7：00の朝食後、バスでチャルヴァク人造湖へ向かい、途中日本人添乗員とロシア系地元ガイドからウズベキスタンについての説明があり、植物学者のイヴァン先生 (Ivan Maltsev) も乗り込んできた。この人造湖のそばでカリモフ大統領の別荘、大統領の娘の別荘のそばを通り、赤いポピーの花が沢山咲いている丘で休憩。人造湖へ流れ込んでいる3つの川の一つ (プスケム川) の橋のもとへ流れ込んでいる小川 (アクサルサイ川) を遡って、天山山脈の一番西側の雪山に向かって散歩する。カンカン照りの暑い日で、汗びっしょりになる。河原で持参の弁当を食べて、さらに雪山が見える所まで行って、折り返し、暑さと汗で疲労困憊して下山。バスで湖を一周するように人造湖のほとりのホテルに着いて、シャワーを浴びた。(2013.05.18.)

3日目：チムガン山をトレッキング。前夜は大雨で雷も鳴り、朝食後、曇り空の下を湖畔のホテルを出て、チムガン山脈の別荘地帯を抜けてクンベル山 (2100m) へトレッキングに向かう。そのアジアで一番長いリフト (3.5 km) が頂上の雨で動いていない。別荘地帯へ戻り、チムガン山を見上げる谷をトレッキングして、雪解け水であふれる川を2度ほど渡り、途中イヴァン先生の解説でチューリップの原生種を観察しながら残雪地帯へ達して、弁当。風が寒い。小石は多い山道で下山する時に不覚にも柔らかい土を踏み外して、右手のカメラを地面に置いて、顔面も地面につけるようにして倒れてしまったが、大した擦り傷でなかった。クンベル山のロープウェイが再開したというのでそこへ駆けつけて少し待ったが、やはり再開できなくて別荘地帯へまた戻り、その前山へロープウェイで登ったら (片道5千スー、往復7千スー)、360度抜群の眺めだった。バスで2時間くらいかけてタシュケントへ戻り、チムール広場に面したウズベク・ホテルで夕食、ひとりの参加者が誕生日で、それを祝った。8時過ぎに、2日前に泊まったホテルへ着いた。(2013.05.19.)



(写真は左から：パミール高原を背にキャンプの翌朝ロシア系ウズベク人スタッフと@ザーミン国立公園、民族音楽込みのレストラン@サマルカンド、世界最大のビビハニム・モスク@サマルカンド；In the morning after staying in the tent in the Pamir Plateau, At the restaurant in Samarkand, and Bibi Kanum Mosque)

4日目：ザーミン国立公園トレッキング。5時半に起床して、週間日記をインターネットで Facebook へはアクセスできたが、Mixi へはアクセスできなかった。8時に出発して、国道 M39 と M43 を走ってザーミン国立公園へ向かい、途中で野外トイレをする。ザーミンの町を過ぎて、大きなザーミン貯水池を見下ろす所で一休み、タジキスタン共和国との国境にあるパミール高原の大きな山々が遠くに見える。ザーミン国立公園の入口に大きなサナトリウムがあり、13：20にその近くのチャイハナ (簡易レストラン) でほぼウズベク式の昼食。14時半にはそこから (標高 1200m) 歩いて出発し 6 km のトレッキングへ出発。トランクはバスに残し、もうひとつの荷物は別に (翌日の帰りに通った道から) 馬で運んでもらう。

みんな元気で15：50には標高 2200m の峠まで登り、眼前に土地の人がトゥルクメン山脈と呼んでいる山々 (向こう側はタジキスタン) を見て休憩して、そこから谷のずっと向こうのキャンプ用のテントが遠望できる。あとはおおむね下りで、雨であふれた小川を渡り、ほぼ平地を歩くような感じで18時には広い尾根のテントへ到着。それぞれ2人用・1人用テントに入って準備。19時に大きな黄色のテントに集合して夕食がなかなか始まらないと思ったら、大雨が降り出し、しかも雷も轟き、生きた心地がしなかった。幸いテントは頑丈で雨が漏らず (ドイツと合弁のロシア製)、ワインとウォツカで大騒ぎして待つうちに、20時少し前には夕食も始まり、雨の合間を縫ってテントに帰り、21時過ぎに就寝したが、テントに当たる雨の音でよく眠れなかった。(翌日ガイドから聞いた話しでは、我々の就寝後30分くらいで空が晴れて星空がきれいだったという。)(2013.05.27.)

5日目：ザーミン国立公園からサマルカンドへ。雨は朝まで続き、7時少し前にほとんど上がったので起床、少し寒いくらいの中でロシア式と日本式のラジオ体操。7時半に朝食 (丸い暖かいナンにバター、ヨーグルトなど)、8時に出発して、雨で道がぬかるので付近の散歩は止めて、ひたすら下る。9：45に公園入口近くのバスに到着し、バスで公園を出て、サマルカンドへ向かう。途中草原に羊やヤギや牛を飼っていて、菜の花やその他の花などもあったので、時々止まって写真を撮ったり、野外トイレをする。ジジャクで国道 M39 に入りひたすらこ

のタシュケント～サマルカンドへの道を直進して（鉄道も並行、玄奘三蔵は行きも帰りもこの道を通っている）、サマルカンド州へ入る時に警察の検問所があり、12:40には道路わきの「カボブホナ」（Kabobxona）とあるチャイハナ（軽食堂）で串焼き肉中心の昼食、隣りはドイツ人グループ。そこを出るとすぐ「チムールの門」と呼ばれる岩山が道路に張り出して門のように見えるところを通り、またひたすら国道を歩き、サマルカンドへ入る前で検問所を通り、17時過ぎにザフラシャン川・カラダリア川を渡るとすぐシルクロードの大中継都市・**サマルカンド**に着いた。

ホテルは新市街で中心からも少し離れたところで、みんなゆっくりシャワーを浴びて、私らは大きな交差点（ウルグベク通り x ベルニー通り）向かいのオリエント・スーパーで物色したが興味あるものではなくて、隣の携帯電話の店の地下でウズベキスタン音楽CDを探したら、CDにありっただけの伝統的および現代風の歌を入れてくれて4千ルー（200円）を払った。夕食は19時少し前からレジスタン広場のレジスタンという店でハンバーグ風などが出てあまりよくなかったが、サマルカンドのPulsarビールと初めに出了たラグメン（うどん風）はよくて、音楽大学の学生4人が演奏する**伝統音楽演奏**（太鼓・小型のチェロ・横笛・5弦琴）付きで、隣の伝統的な座席に座ったアメリカ人家族がキルギスのビシュケクに住んでいるそうで写真を撮ってくれたりして、21時少し過ぎにホテルへ帰り、パソコンをいじって22時過ぎには寝た。（2013.05.22.）

6日目：サマルカンド観光。朝5時半に起きてすぐ、インターネットでMixiへやっとアクセスできた。7時の朝食後ゆっくりして、9時にバハディールさんが運転するIvecoバスに代わって出発した。まずチムールの寵愛した妃の名を冠した**ビビハニム・モスク跡**に寄り、ここは前だけきれいに復元されていて、内部や裏はひどい状態で、もともと急いで作ったもの。近くのシヨブ・バザールはきれい過ぎて気に食わなかったが、干し果物やサマルカンド・ナンをいくつか買った。次に**ウルグベク天文台跡**を訪れて、チムールの孫にあたるウルグベク王は戦争が嫌いで、ここで星座表を作ったり、1年を現在分かっている365日6時間何分何秒と8秒しか違わない正確さで推測したりしたという説明が博物館にあった。残っている天文台の基礎に、半径30mくらいの半円形の巨大な六分儀（sextant）が復元されていて、六分儀といえば大航海時代に船上で使われた携帯型の六分儀しか知らなかったのが参考になった。この近くのもとのサマルカンドの都市があった**アフラシアブの丘**とその博物館には**ソグド人**の壁画があるが、あいにく停電でうまく見えなかった。

昼食は市内のムバルさんの家の中庭で取って、サムサ（ロシアのピロシユキに近い）とピラフが出た。15時少し前に**チムール廟**へ着き、これはなかなか真面目な廟でチムール一族の墓があり感心した。次に**レジスタン広場**へ行き、3つのもとメドレセ（神学校）があり、ここでいろいろなお祭りをやる中心広場で、この日は2年おきに8月20日に行われる世界アジア音楽祭の入場行進を練習していた。16時少し前から**シャヒジンダ廟群**に着き、ここは女性も含めたいろいろな人の廟が様々な形で残っているところで、これを最後にホテルへ戻り、麺類・梅干し・タクアンなどの日本食風と土地の料理が混じった夕食で、この旅行社の慣例だそうで、あまり感心しなかった。ホテルの部屋に添乗員さんが毎日1枚の手書き絵日記を書いてコピーを入れてくれて、これもこの旅行社の慣例だそうで、感心した。一日快晴だったので、夜の星空を観測にいったが、上弦の月と大都会の灯火で、星空は観察できなかった。（2013.05.23.）

7日目：タシュケントへ戻り観光。朝8時にサマルカンドのホテルを出て。バスはひたすら国道を300km走りタシュケントへ戻る。国道M39をそのまま走るとカザフスタンをかすめて通るので途中で少し迂回して、トイレ休憩で出遭ったフランス人グループの一人と話したら、ヒヴァ（町の城壁が残存）、ブハラも回って来たという。シルダリア川を渡り、タシュケント市内へ入ったところの路傍のラグマン（うどん、中国語で拉条子）がおいしいレストランで鶏肉のシャシュリークとウォツカと一緒に昼食。そこを出て、14時半には終戦後シベリアから抑留されてここで亡くなった79人の日本人の**墓地**@ヤッカサライ通り（アライ・バザールの向かい）を見て（他の場所の墓地の表示もあった）、15時半には市内に入り**ウズベキスタン国立歴史博物館**（3Fのウズベキスタン南部のテルメズの仏教遺跡、4Fの20世紀の展示が面白かった）を見る。その斜め向かいにある、日本人抑留者が建設にたずさわった**ナヴォイ国立オペラ劇場**（設計者はレーニン廟も設計したロシア人）を外から見て、そこから歩く途中で蚤の市を見て、**チムール広場**へ行き、これで市内観光は終わり。

夕食は「Season」と書いたコーヒーショップ風の所で、生ビールだけがおいしい食事をした。面倒をみたウズベキスタン旅行社から小さな陶器製おじいさんの人形を各自もらい、ザーミン国立公園の高所2200mまで登った証明書ももらい、うれしくてそれなりに盛り上がった。19時少し前に空港へ着き、通関後、ウズベキスタンの貨幣・スムは外貨に交換できないのですべて簡単なものを買って使い果たした。空港のインターネットは遅くて、メールさえ取れなくて、そこで出会った40人の日本人団体はひとりの添乗員でトルコからの帰路にここで乗り換えているだけだそうで、その勢が飛行機内はほぼ満員だった。22時少し前出発のウズベキスタン航空が30分遅れて出発し、8時間半かけて成田に翌朝10時に着き、JR普通列車のグリーン車で家へ帰った。（2013.05.24.）

ウズベキスタンはカリモフ大統領が強権で20年も支配する国で、もとソ連邦の他の中央アジア4か国（カザフスタン・キルギスタン・タジキスタン・トルクメニスタン、言葉はペルシャ語系のタジキスタンを除いてすべてチュルク語系統）との間でいつも民族騒動・水利権問題があり、街の要所・要所、12ある州の各州に入る際、大きな町に入る際に必ず警察の検問があり、まるで警察国家のようだった。いろいろな民族が雑居しているので仕方ないとも言えて（例えばサマルカンドは住民数から言えばタジキスタンに属すべきようだ）、でも現在は大きな騒動はなくて安全に見えた。人々は我々に必ず「コンニチワ」と声を掛けるし、必ず一緒に写真を撮らせてと言って人懐っこい。年配の人たちやレストランなどではロシア語の方が英語より通じて、私は練習も兼ねて「ヴィノー・クラスノエ」（赤ワイン）などとロシア語で押し通したが、子供たちは英語を習っているらしく英語で話しかけてきた。日本車はほとんど見かけず、新車はほとんどが Daewoo か GM シボレーの小型車で、フェルガーナのアサカに GM/Daewoo の工場ができて、輸入車関税は 100%だという。一度だけ昔懐かしいロシアのジグリ（海外ブランドは Lada）を見かけた。バスは Higer バス（中国の金龍バス）と Iveco（イタリア）を使ったが、日本のいすゞ自動車が多分この地方の習慣で多額の賄賂を払って近々生産を開始するらしい。第二次世界大戦中にソ連の航空機産業などあらゆる工業がこちらへ引っ越したようで、技術力は基礎ができていようだ。携帯電話サービスの多くは Beeline（ロシア）、たまに Ucell（スウェーデンの TeliaSonera）の宣伝を見かけた。お土産はチムガン山から下りた所で買った蜂蜜、国立公園へ行く途中に道端で買った小さな丸い塩辛いチーズ（Kurt と呼ぶ）、サマルカンドで買った干し果物類、大きなベーグル風のナンは3つ、ウズベク歌謡の手製CD。

この旅行を通して、中央アジアの自然と歴史と文明を直接多少触れることができた。私は世界遺産などという税金の無駄遣いには一切興味がなくて、旅行にはその土地の自然に触れて、できたら汽車の駅へ足を運んで庶民の生活にも触れて、また大学構内へいってみんなどうい教育を受けるのかに思いをはせるのが好きなのだが、このツアーでは駅や大学へは行けなかった。

注：中央アジアの国々の地図は世界地図帳でも詳しく載っていないが、ウズベキスタンについては当地のおもなホテルの売店で英文カラー地図「Uzbekistan Tourist Map」(State Scientific Industrial Enterprise "Cartographiya", 2008年発行、6千ルー=2013年5月現在)を売っており、これは開くと縦68cm x 横88cmになり、表面は12州と1自治州が色分けされて州都の位置も書かれ、おもな道路（例えば国道：タシュケント～一時カザフスタンに入り～サマルカンドは M39 と旧ソ連邦時代の番号を記載）、川と支流と湖水、山脈と支脈なども記入されていて、裏面はタシュケントとサマルカンドが一般の旅行ガイドブックの地図より広く書かれていて便利である。

旅行から帰還後

ウズベキスタン旅行から帰った日と次の日は、時差ボケのため家でブラブラして、Wikipedia のウズベキスタン関係を新規作成、更新をした。新規作成したのはプスケム川、アクサルサイ川（英語版も）など。更新したのは、サマルカンド（国立外国語学院など）、ザーミン国立公園（位置と外国人の訪問可能）、チャルヴァク湖（3つの支流）、ナン（サマルカンド風ナン）、タシュケント・サマルカンド高速鉄道など。（2013.05.25.）

中央アジア（2）：中国新疆ウイグル自治区・敦煌・西安旅行



（写真は左から：カレーズは長城と大運河に次ぐ大工事、火焰山を登る、クチャ駅で出迎えるウイグルの人々；Karez was China's third largest construction after the Great Wall and the Grand Canal, Climbing the Flaming Mountain in Turpan, and the Uyghur people welcoming their friends at Kuqa Railway Station）

旅行準備

アレクサンドラ・カヴェーリウス著「ウイグルの母、ラビア・カーディル自伝」（講談社、2009、ドイツ語版 2007 の翻訳）をワイフが図書館から借りてきたので、新疆ウイグル自治区の旅行を控えて急いで読んだ。（Rediya Kadeer = 热比娅·卡德尔, Alexandra Cavalius, "Die Himmelsstürmerin" (2007, Wilhelm Heyne Verlag, a division of

Random House GmbH, Munich)。彼女は1948年新疆の北部アルタイに生まれて、中部のクチャやアクスなどで生活して、中国有数の商人となり、中国政治協商会議の場で共産党政府の新疆ウイグル自治区管理を糾弾したため1999年から6年間投獄されて辛酸を舐め、2005年米国へ亡命。現在、世界ウイグル会議議長、在米ウイグル人協会会長、ワシントンDC在住で、つい最近世界ウイグル会議を日本で開催しているので、チベットのダ・ラと並ぶ中国政府にとっては頭の痛い存在。投獄中の記述があり、ナチ時代のドイツ、スターリン時代のソ連、戦時中の日本よりもひどい扱いをされたようだ。今回の旅行にもこれはよく覚えて、慎重に行動しよう。(2013.06.06.)

5月は中央アジアの西側のウズベキスタンへいったが、6月は中央アジアの西側の中国・新疆ウイグル自治区へ行き、帰りに甘粛省敦煌の莫高窟(初めて)と陝西省西安(4回目)にも寄る予定。そのためもあり、以前学生時代に読んだこともある井上靖著『敦煌』を図書館から借りて、改めて読んでみた。20世紀の初頭に敦煌の莫高窟で昔の貴重な仏教経典が多数発見され、清朝政府が全然興味を示さない中、海外から来たスタインやペリオや大谷探検隊が持ち帰るといふ有名な事件があったが、それは北宋の頃西夏につかまってその外人部隊に組み入れられた漢人が西夏語を学び、仏典を西夏語に翻訳する事業にたずさわって、後に反乱を起こしたので西夏軍に焼かれて攻め込まれる前に石窟に埋めたものという歴史小説で、前半は面白かったが、後半はそうでもなかった。私は甘粛省の蘭州へは行ったことはあり、でもそこから西へ行くのは初めてなので楽しみにしている。(2013.05.30.) また以前、大連の友人(岡田稔)が同じような旅程で「新疆自治区・シルクロードの旅」(2006年)を行っており、彼のシルクロードと食べ物を中心とした旅行記を私のホームページ

<http://www.abt247.com/logos/china/xinjiang.html>

へ入れさせてもらっているので、これも参考にした。

旅行

先月の中央アジア西部のウズベキスタン旅行に続いて、中央アジア東部の中国新疆自治区・敦煌・西安旅行へ行ってきた。大連の友人2人(高木勝と齋藤実敏)と名古屋から来た7人と総勢10人が、14日間の特別スケジュールで行ったもの。

1. 朝8時の飛行機で大連を出て、石家荘を経て、14時半ころ中国新疆自治区の中心地・ウルムチ(シルクロードの天山北路)へ到着。市内のホテルに着いて、晴れの暑い日だったが、市内の名所・紅山公園という丘へ登って遊び、そこになぜか林則徐の石像があり、その理由はあとの嘉峪関(下の第12日目の記述)で分かることになる。夕食直後ちょっとしたハプニングがあり、大連組のひとりの顔が蒼白になり、救急車で中医病院へ運ばれて、私はずっと点滴に真夜中まで立ち会ったが、すぐ元気になり、その後名古屋組が腹を下したりしたが、皆健康上は他に何もなかった。
2. 漢族の男性ガイド付き中型バンで東方面のトゥルファン方面へ向かい、昔の天山北路(国道312号)を走り、ここは三蔵法師が逆方向へ歩いたところ。まず塩湖が見えて、そこは「草原情歌」などの民謡を採譜して有名な王洛賓の歌「達坂城的姑娘」にある達坂城という村で、建設中の高速鉄道も見えて、次に白楊河に沿った樹木のない急峻な渓谷を下りて、ここは玄奘三蔵の旅日記にも出てくるという。平野へ出ると、そこらあたりは「風谷」だそうで沢山の風力発電の施設が見えて(施設が古いのか3割くらいの風車が壊れて回っていなかった)、小草湖サービスでトイレ休憩。その後天山南路(国道314号線)の分岐点を過ぎて、ゴビ灘(荒地の平原)をひたすら走り、ひまつぶしに参加者10名の自己紹介をしたり、ウイグル語の「ヤフシムーセス」(こんにちは)、「アスタラ・マレイクム」(同=神様が共におられますように!)といって男は右手を左胸に当てる)、「ハイエル・ホシ」(さようなら)、「ラフメット」(ありがとう)などを習ったりするうちに、昼ごろトゥルファンへ間もなくという所でまた休憩して、有名なハミ瓜(哈密)が出たので買って食べる。トゥルファンへ着いて昼食後。午後はひどく暑い中を高昌故城、アスタナ古墳、ベゼクリク千仏洞、今回の旅行の1番目の目玉・火焰山(孫悟空が芭蕉扇を得るために鉄扇公主と戦った所)へ着き、道路脇でこの山を見せてくれればいいのに、わざわざ火焰山旅游区を作っているのだから、入場料を払わされて入り口から入ると左右に『西遊記』からのエピソードが20くらいのレリーフになっている所を通り、あとはめぼしいものはない。旅游区の向こう側に石油採掘の油性が見えて、新疆へ来た実感を得る。夜、「吐魯番盛典」と称する歌と踊り(290元)を見たが伝統的なものがなくて全然面白くなかった。この日以降、干しブドウ(去年のもの)、干しアンズ、季節的に早かったがハミ瓜などを沢山食べて、名古屋組が大体畑を持っていて、友人にハミ瓜の種を持ってきて日本で栽培するとうまくゆかず、再挑戦するのはどうすればいいかの話が続く。
3. トゥルファンのアイディン湖(世界で2番目の低地で、乾燥が進みもう小さな池になっている)へ行き、次に交河故城へも行き、2番目の目玉・「カレーズ」を見た。民家で昼食後、オーミン塔(蘇公塔)、葡萄園にも寄る。夜中の零時発の夜行列車のコンパートメントに乗ってクチャへ向かう。夢うつつの中に単線なので対向列車の待ちが多く感じた。
4. 朝起きると列車は天山山脈とその前山の中を走っており、国道と川に沿って機密性の高そうな金属工場も見

えて、お湯をもらってカップラーメンをすすりながら、和静を過ぎるあたりから平野になり、タクラマカン砂漠の東端へ入ったようだ。14時半にやっと天山南路（別名：西域北路）上のクチャ（庫車）へ到着し、駅を出る時にウイグル族の人々が沢山出迎えていて、みなさんの顔が中国人とまるで違うので（彼らはチュルク系民族）、おや外国へ来たかなと思う。カシュガルからウイグル族の女性日本語ガイドが小型バンで迎えに来てくれて、クチャ郊外へ赤い岩肌の「天山神秘溪谷」を超えてキジル（克孜尔）千仏洞へ行き、帰りにクズルガハ千仏洞、クズルガハ狼煙台、クムトラ千仏洞（正式公開前だった）を案内してくれた。途中ヤルダン地形（雅丹地貌）という小さな先がとがった土の盛り上がりがある荒地を通り、これは砂地で波状に盛り上がりがある砂漠（沙漠）や砂礫の荒地であるゴビ灘（戈壁灘）に対していうらしい。その後4日間、このガイドから、3番目の目玉・ウイグル族の文化と宗教（イスラム教）もいろいろ学び、例えばコーランはアラビア語だけと聞いていたが、ウイグル語で読んでいい、イスラム教を信じていることほど幸せはないという。古典文学はと聞いたらナヴォイの名前が出てきたので、これはウズベキスタンのナヴォイ国立劇場に出て来る人なので、チュルク系語族はみな共有しているのだと思った。

- 朝クチャの北郊外へ国道（217号）線を走り、スバシ（蘇巴什）故城を見た。続いて小型バンでクチャから国道（314号線）を輪台へ行き、そこから4番目の目玉であるタクラマカン砂漠横断をした。石油開発のために作った2つの砂漠公路のうち東側の古い公路（522km）を北から南へ縦断しているもので、前夜に雨が降ったので曇り空の下、大変涼しい砂漠横断で拍子抜けしたが、タマリスク・胡楊・砂ナツメは砂漠の3つの英雄（植物）だそうでそのうちのきれいな胡楊の林を沿道に見て、タリム河を渡り、そこからチェルチェン（且末=Qiemu）へ向かって支線が出ている塔中でラーメンの昼食。砂漠公路の途中で車を止めて砂漠の中で裸足になって写真を撮ったりして、私にとって砂漠は初めてなので最高によかった。夕方、西域南路上のニヤ（民豊）へ到着して、町の招待所に泊まり、この旅で唯一インターネットも使えない3つ星の安宿だった。
- 西域南路（国道315号線）を西へ行き、左手にクンルン（崑崙）山脈が見えるはずだが、小雨で見えない。旅行グループのひとり（亀井守）が新疆へ何回か来ている人で、彼は漢詩に各地の挿絵入れてノートに記録するのが趣味で、唐の岑参（しんじん）の

「君不聞胡声最悲 柴髯緑眼胡人吹
吹之一曲猶未了 愁殺楼蘭征戍兒
涼秋八月蕭關道 北風吹斷天山草
崑崙山南月欲斜 胡人向月吹胡笳
胡笳怨兮將送君 秦山遥望隴山雲
邊城夜夜多愁夢 向月胡笳誰喜聞」

という詩を教してもらい、岑参の名前は始めて知ったが、大変情が出ていい詩で、この詩を書いたのはこのあたりだろうと私は勝手に想像した。午後ホータン（和田）に着き、5番目の目玉・玉龍喀什河（白玉川）で白玉などの宝探しをしたが、残念ながらいい玉は見つからなかった。シルク工房、玉加工場を見て、団結広場でクルバン・トゥルムおじさん（この地域の干田=ケリヤから1958年にウルムチへ共産党による解放を感謝しにロバで行き、北京まで飛行機で運ばれて毛沢東彼と握手して、中国共産党の宣伝に使われている人）の像の写真を撮って、屋台へ繰り出して羊肉とナン、シャシュリーク（串焼き肉）、ハミ瓜などを食べ歩いた。

- さらに国道を西へ向かい、小雨模様でまだクンルン山脈が見えない。前夜の大雨で、途中国道に鉄砲水が押し寄せてきて、間一髪の差でそこをジャブジャブと無事通過し、砂漠地域は管理が本当に大変だなと思う。ヤルカンド（莎車）でヤルカンド・ハン国の王陵を見学し、このハン国の古典音楽は国王とシンデレラ的な出会いをしたアマニ・シャハン（Amani Shahan、亜曼尼莎汗）がまとめたものということで、彼女の物語の絵本を買う。王陵近くでハトの肉のラグメンを昼食に食べる。さらに進んで、インギサル（英吉沙）でナイフ類の店をひやかして、ついにウイグル族文化の中心・カシュガル（喀什）へ到着。吐曼河の東側（ダウンタウンとは反対側）にある銀瑞林国際大酒店という5つ星の新しいホテルに投宿。（2013.06.17.）



(写真は左から：ムスタグ・アタ山@カラクリ湖、ウパール村のバザールでナンを売る、祁連山脈を背景に嘉峪関；Photos from left: Karakul Lake with Muztagh Ata Mountain, At the Monday Bazaar in Upal Village, Jiayuguan Castle at the westernmost point of the Great Wall)

8. カシュガルで、早朝5時に起こしてもらい6時にホテルを出て、今回の旅の**6番目の目玉・カラクリ湖**（喀拉庫勒湖）を見にいった。これは中国・パキスタン公路の途中にあり、夜が明けるころ左にクンルン山脈の雪山が見えてきて、ウィグル族の家が終るとキルギス族の家があり、前々日の雨で超大型トラックが動けなくなっている所で1時間足止めされる。ガイズ川（盖孜河）溪谷に沿ってさらに上り、ガイズ検問所でパスポートを見せて抜けて、右にゴンクール（公格尔）・ダム湖が見えて、ここもきれいな所だ。タジク族自治区に近くなると左にパミール高原の congool 山（7719m）の続きが見えてきたと思ったらカラクリ湖で、眼前にムスタグ・アタ（7546m）の雪山が迫っている。（カナダのロッキー山脈のルイーゼ湖やチベットのヤムドク湖も見たが、雪山は遠くに見えるだけでこんな眼前には見えない。）帰りにウパール村の月曜バザールに出くわし、そこで昼食休憩で、私はラグメンの昼食。カシュガル市内へ戻り、エイティガール寺院（艾提尕尔清真寺）を見て、近くの職工街へも寄り、飛行場へ急いで、午後の飛行機でウルムチへ戻り、そこに泊まる。ホテルの最上階で夕食後、近くの店に西瓜を買いに行くと、やはり1元、1、5毛などの硬貨がウルムチでも使えない。これまで新疆全体で硬貨が使えなかったが、これは沙漠で落とすと砂の中へ深く沈んでしまい探せなくなるので、沙漠が多い新疆では硬貨は使われていないということを知った。
9. 朝8時の飛行機で甘肅省敦煌へ移動するためにウルムチから飛行場へ行き、一人旅の日本人に会う。退職後旅行業者のライセンスと取り、すべて自分で計画・予約してカザフスタン、ウズベキスタン、新疆などを旅しているというので感心した。敦煌へ着くと小雨模様で、ホテルへ落ち着いた後、敦煌のどこを見るかでガイドともめて、玉門関は旅程に入っていたが費用と時間の関係で行けないことになり（敦煌にある玉門関は唐時代の玉門関で、漢時代のものは瓜州（もとの安西）のダム湖の下にあり、翌々日このダムを車窓に見ることになる。）、結局11時半に専用バスでホテルを出て、まず映画「敦煌」作成時に作った「敦煌古城」映画村を見て、次にガタガタ道を走って**7番目の目玉・陽関**を見に行った。王継が唐詩で
「渭城朝雨潤輕塵、客舍青青柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人」
と歌った所で、盛り上がった石の塊へ登った以外は何もない荒涼とした遺跡。夕食は近くの牛肉麵専門店、その後この地方では毎日昼食・夕食においしい牛肉麵ばかりを食べた。
10. 敦煌の2日目、ホテルのロビーでスペイン人のグループと「中南米のスペイン語はアンダルシア地方方言ベースというのは誤解で、すぐ西のエストリマドゥーラ地方の方言だなどと雑学会話をして、彼らはバルセロナのプロサッカーチームのオーナーの一行だという。まだ小雨が降っていたが、専用バンで**8番目の目玉・鳴沙山と月牙泉**を見学。入り口で下肢を覆う布製「靴套」をはいて、月牙泉を巡って、鳴沙山に登り、中国全土・世界から訪問者が来ていて、「貴州から来た」、「日本からだよ」など会話を楽しむ。小雨は止まず、午後は自由時間になり、ホテルでパソコンは止めて、街中から郊外へ移動して新装なった敦煌博物館を見て、売店で本も買い、まあまあよかった。夕食後は敦煌大劇場で「敦煌神女」（190元）というサーカスと踊りを物語風にしたもので、トゥルファン之歌と踊りがひどかったのもあって、大変すばらしく思った。
11. 敦煌滞在3日目にして我々の祈りが通じて、**9番目の目玉・莫高窟見学**がOKになり、これを見に行った。19窟（唐～宋時代）から始まって**16・17窟**（井上靖の『敦煌』で最後に西夏文字の仏典を隠した所）など**10窟**ほどを見ただけだったが、大変面白かった。そのあと専用バンは嘉峪関市方面へ河西回廊を延々と移動して、途中に保存状態はよくない**榆林窟**にも寄った。建設中の高速鉄道がまた見え出して、また巨大な風力発電施設が見えて（しかも巨大な風車の羽を運ぶトラックと何台もすれ違って）、長い車の旅なのでつれづれにみんなのあだ名をつけることになり、私は何でも浅はかな興味を示し雑記帳に記録していたのであだ名は**ブリタニカ**、別名：ブリちゃんまたはブリッコ。
12. この日は朝食後多少余裕があり、9時半にホテルを出て長城第一勇関、つまり長城の一番西端に当たる**嘉峪関**を見にいった。（長城第一関、つまり一番東端は河北省の山海関にある。）北に黒山（別名：北山）、南に祁連山脈に挟まれた15キロと河西回廊が狭まるところに長城を築いていて、嘉峪関は立派なお城だった。（林則徐が広東の総督をしているときにアヘンを禁止したのがアヘン戦争の始まりだったといわれていて、イギリス軍が予想に反して天津に上陸したので、清朝は彼をイリへ左遷した際に、彼が『出嘉峪関感之賦』と題する詩の中で
「一騎纔過即閉関　　一騎わずかに過ぎれば即ち関を閉ず
中原回首涙痕漣...　中原首をめぐらせば涙痕漣（さん）たり、...」
と書いた所で、彼はその後イリで善政を敷き、その意味でも彼は大変尊敬されていて、上の第1日目に書いたウルムチの紅山公園に林則徐の大きな像があった理由がやっとわかった。）また近くの長城第一墩という狼煙台へも行き、その川（討頼河）にも下りて吊り橋を渡って、少々のハイキングを楽しんだ。王翰の詩

「葡萄の美酒夜光の杯、飲まん欲して琵琶馬上に催す、
酔うて沙場に臥す。君笑う莫（なか）れ、古来征戦幾人か回（かえ）る」

に関する像があった。この帰りに鉄鉱石輸送専用の鉄道を横切り、私は中国の製鉄所の位置には詳しいつもりだったが、戦後嘉峪関市で鉄鉱石が見つかり、ここに大きな酒泉製鉄所があるのを始めて知った）市内の清真牛肉麵で昼食後、飛行機で陝西省西安へ移動。西安へは私は過去に2度来ている：

<http://www.abt247.com/logos/seikokai/china1998.html>

<http://www.abt247.com/logos/china/other.html#xi-an>

宿は旅行業者の計画ではシェラトンホテルだったが、実際はウェスティンホテルで、これまで最高の5つ星ホテルだった。

13. 朝西安の東郊外へ向かい、今回の旅の10番目の目玉・始皇帝の兵馬俑のデジタル写真を撮りに行く。前回見た時には感激したが、今回は感激がなくて、掘り出した時には彩色できれいだったのが灰色の単色になってしまっていると初めて聞いて、次回はカラーで復元された像を見たいと思った。でも以前はアナログ写真だったので、沢山のデジタル写真を撮る。次に近くの楊貴妃が水浴びしたので有名な清華池へ寄り、西安事件で張学良が裏山の驪山に隠れていた蒋介石を捕えた所を写真に収めて、市内へ戻り興慶公園で阿倍仲麻呂の石碑を見て（西安はウェスティンホテルのロビーにチンピラどもがたむろしているような古い町で、去年の反日騒動で他のチンピラどもが石碑を煤で汚していた）、玄奘三蔵法師が仏典を翻訳したという大慈恩寺の大雁塔へ登った。夕方、西安の娘さんと結婚している以前の同僚（泉佑二）に来てもらい、彼と大連の仲間2人と屋上ビールガーデンで祝杯を挙げ、また西安事情を聞く。

朝ゆっくりと西安市内の鐘楼・鼓楼を車内から見て、安定門（西門）に上がり町をめぐる城壁を歩き（ここがシルクロードの出発点）、陝西省地質鉱産研究所に寄り宝石類の買い物3種（白玉＝ホータン産、東陵石＝西安近くの東産、虎睛石＝南アフリカ産のTiger's Eyeと似ている）をして（研究所なんて大ウソ）、そこから少し西にある「シルクロード起点群彫」を見てから西安空港へ向かい、途中で渭水を渡るので写真に撮り、午後2時過ぎの大連直通飛行機に乗り午後4時過ぎに大連へ着いた。（2013.06.23.）

お土産はホータンの安物玉石3種、さまざまな本、ウイグル族の歌と踊りのVCDとDVD、西安の飛行場で買ったナン風の「岐山特産・油酥鍋盔」など。このナンはお勧めしない、やはりカシュガルの方がいい。カシュガルでは歌と踊りを見なかったの、そこで買ったVCDとDVDを後で見たが、大変いい内容だった。ウイグル族の歌を私は中国語に直した「青春舞曲」、「阿拉木汗」などを知っていたが、ウイグル人は全然知らない様子で、また伝統的な歌はこのDVDで見ると限りまるでトルコのイスタンブールで演奏しているようなものだった。

この旅行は名古屋組（7人）のひとりが原案を作り、大連組（3人）のひとりが奥さん（中国人）に旅行業者へスケジュールを作らせたもので、細かい点では例えば砂漠公路はクチャから砂漠の西側の新しい公路を行けばニヤへ寄る必要がなく1晩節約できたとか、敦煌へは2晩も泊まる必要はない、カシュガルにもう1晩泊まってさらにウイグル族の文化に触れたかったなど事後感想はあったが、全体的には良かったと思う。上に書いた漢詩はこの旅行原案を作った人が長旅の車中で教えてくれたもので、彼はこうした漢詩をよく研究してカラフルなスケッチブックも作っていて、私も高校時代の漢文を思い出して書いたもの。

カシュガル郊外では2か月前に暴動が報じられていたが、部分的なことと理解して、また旅行中特に危険と思ったことはなかった。ただし、旅行から帰って翌週にもトゥルファン地区の村で27人が死亡する事件が報道されているので、中国の新疆ウイグル自治区支配がうまく機能していないのは明らかだと思う。ラビア・カーディルは北新疆の出身で、アクスとカシュガルで財をなして中国協商会議議員に選ばれ、そこでウイグル地区の現状と改善希望について演説をしたため監獄に入れられ、最近米国へ亡命して世界ウイグル会議議長になり、今年日本で会議も持った人で、彼女についてウイグル人はみなよく知っているようだったが、政治問題なので会話ははずまなかった。

旅行から帰還後

旅行へ行く前に『地球の歩き方、中国』（最新版）を買って持っていったが、敦煌や西安に着いては詳しくはなかったが新疆についてはウルムチとカシュガルだけしか書いてなく（持参した古い英文ガイドブック『Lonely Planet - China』（2005年）と中文ガイドブック『自助游中国、完全手冊』（2002年）は新疆についてもよく書いてある）、旅行中はグループの人が持っていた『地球の歩き方、西安とシルクロード』（最新版）を見せてもらっていた。旅行から帰ってみると中国の我が家にこの本の古い版（2001年）があり、それも頼りにして、Wikipediaの新疆関係の項目が少なかったので新規作成したり、更新をしたり、写真も入れた。新規作成したのはヤルダン地形、アマニサハン（＝アマニシャ・ハン、ウイグル伝統音楽をまとめた女性）、カラクリ湖、スバシ故城、ヤナギバグミ（砂ナツメ）、コトカケヤナギ（胡楊）、ムスタグアタ山、蘇公塔、など。ついでに西安の友人が行った敦煌

ヤルダン国家地質公園のも作った。(2013.07.11.)

結論

この旅行をもって、中国の少数民族が多く住む内蒙古自治区、雲南省、四川省、海南省、チベット、新疆などへ行って来たことになる。大国のソ連（ロシア）も、中国も、米国だって、少数民族問題はうまくいってない。小国の日本も（アイヌや沖縄の人たちに対し）、フランスも（南部のラングドック語の人々に対し）そうだった。ソ連圏から独立したウズベキスタンも、内情は大変な警察国家で、12州の境界を超える毎にまた大都会へ入る毎に警察の検問所があり、カリモフ大統領が専制政治を敷いていて、特にフェルガーナ盆地で少数民族問題が火を噴いた時に、反対派の弾圧方法は凄惨を極めて、ウズベキスタンからしかアフガニスタンへ進駐できない米国も、これもあってアフガニスタンから引き上げるようだ。

しかし、チベットや新疆でくすぶっている民族問題はどうすべきなのだろうか？チベットへ行って分かったことは、20世紀中ごろに至るまでドライラマとその取り巻きはチベット人民をまるで中世の農奴のような扱いをしていて、それで「フランス革命」、「ロシア革命」のような解放が行なわれた。新疆も、もし仮定としてウズベク人の国家として独立したら、内にかかえる他民族の問題もあり、ウズベキスタンのような警察国家になるか（高齢のカリモフ大統領に有事の際は娘に政権が渡るような北朝鮮まがいのことを考えているようだ）、イスラム原理主義が台頭するアラブの春を通り越したエジプトのようになるのだろうか？政治問題にうたいというか、ほとんど興味がない私には一週間ぐらい旅行をただけでは分からない問題だが、そこに身を置いて考えるいい機会にはなった。

注：普段自分のパソコンへ書き、Mixi（および時々Facebook）へも入れている週間日記をそのまま使ってまとめましたので、あまり読み易さには気配りしていない点をご容赦ください。

以上